

漆塗り（髹漆）

髹漆とは、日本の伝統工芸における漆塗りの総称である。旋盤や竹編みなど素地（下地）を整える技法も含まれるが、塗装や象嵌などの装飾技法とは区別される。

日本では、漆の木が豊富にあったこともあり、少なくとも紀元前 4,000 年頃から漆器が作られていた。17 世紀になると、藩主による地場産業の育成を背景に、多様なスタイルの漆器が作られるようになり、伝統は急速に発展して洗練されていった。それ以来、漆を塗るための道具や技法は、日本独自の豊かな文化として発展していった。

「髹漆」の技法は、木地に直接漆を塗る方法と、下地をつくり、その上に漆を塗り重ねる方法の 2 つに大別される。この 2 つの方法は、外観だけでなく、最終製品の耐久性、耐熱性などの機能面でも大きく異なる結果をもたらす。どちらの方法でも、漆を何度も塗っては固め、次の漆を塗っては固めるという工程が必要となる。そのため、この労力のかかる作業は、数ヶ月または数年かかることもある。

また、漆は難易度の高い素材である。漆は、ウルシオールという成分が空気中の酸素と反応して光沢を出し、耐久性も高いが、この反応が温度や湿度の変化に弱いのである。特に電気の普及で空調管理が可能になる以前は、漆がきちんと固まるように管理するには特別な専門知識が必要であった。さらに、濡れた漆にはホコリやゴミが付着して上塗りが損なわれる可能性があるため、注意しなければならない。そのため、湿気を均一に保つのに役立つ保湿性の高いヒノキやスギを使った「漆風呂」のような防塵用の乾燥箱など、独自の道具が開発された。

石川県では、輪島、山中温泉、金沢を中心に漆器工芸が盛んである。1974 年に重要無形文化財に指定され、赤地友哉（1906-1984）が保持者に認定された。他の石川県の保持者として、1995 年に塩多慶四郎（1926-2006）、2006 年に小森邦衛（1945-）が認定されている。